

No.2

March 2022

HIAIZUMI GAKU KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi New Studies

Contents

Keynote speech

Belief in Yakushi by the Oshu Fujiwara Clan and the Akazawa Seven Buddha
Yakushi Statues

ASAI Kazuharu

Research Report

Comparative study on the planning of Hiraizumi “This shore” and “Other shore”

OKADA Ken

Study on the collection of excavated written materials

MIKAMI Yoshitaka

Contents of the event

Report of the 2nd meeting for Hiraizumi Studies

Report of the 2nd Forum for Hiraizumi Studies

World Heritage Hiraizumi Preservation and Utilization Promotion Executive Committee
Iwate Prefectural Government and Iwate Prefecture Board of Education
10-1 Uchimarui, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan

平泉学
研究年報

第2号

令和4年

岩手県・「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会

平泉学 研究年報

第2号



令和4年

岩手県・「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会

序

岩手県では、世界遺産に登録された遺産及び周辺の歴史遺産を総合的に調査研究し、その成果を広く公開し活用していくため、研究機関の整備を検討しています。その一環として、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」の発掘調査を進めるとともに、「平泉文化研究機関整備推進事業」によって、研究者相互の連携、多角的・学際的な研究の推進を図るための共同研究など、研究基盤の整備と拡充に取り組んでおります。

令和2年度からスタートした「平泉文化の総合的研究基本計画」（第3期）では、令和6年度までの5カ年計画において5つのテーマを設定し、岩手大学と岩手県が2つのテーマで共同研究を行うほか、岩手県と国立研究機関等の研究者との共同研究を計画しております。それらの研究成果については、「平泉研究会」および「平泉学フォーラム」などを通じて、多くの皆様へ研究成果の公開と情報発信に努めているところです。

岩手県及び岩手県教育委員会は平泉文化研究体制整備の観点から、研究の拠点をこれまでの「平泉遺跡群調査事務所」から、令和3年11月に開館した「平泉世界遺産ガイドランスセンター」に移し、今後の研究を進めて参りたいと考えております。

今年度刊行する「平泉学研究年報」第2号は、平成12年度に刊行を開始し、主に県と岩手大学の共同研究成果を掲載する「平泉文化研究年報」とともに、県と国等の研究機関の研究者による研究成果をまとめたものとなります。

今後も本年報が平泉文化の研究を進展させる一助となるよう努めて参ります。

最後に、共同研究へのご理解とご協力をいただいた関係機関に深く感謝を申し上げます。

令和4年3月

岩手県教育委員会

教育長 佐藤 博

「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会

委員長 岡部 春美

目 次

I 基調講演

奥州藤原氏の薬師信仰と赤沢七仏薬師像

浅井 和春（青山学院大学名誉教授）…………… 2

II 研究報告

研究報告1 「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」

岡田 健（奈良大学教授

【国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員】）……………16

研究報告2 「出土文字資料の集成的研究」

三上 喜孝（国立歴史民俗博物館 研究部教授）…………… 28

第2回平泉学研究会・第2回平泉学フォーラム実施報告……………42

例 言

- 1 本書は「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会が実施した「第2回平泉学フォーラム」での基調講演及び研究報告を掲載したものである。
- 2 1の事業「第2回平泉学フォーラム」については、岩手県、岩手県教育委員会、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センターと連携して実施した。
- 3 本書の編集は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課と岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターが行った。

I 基調講演

【プロフィール】

浅井 和春氏 (あさい かずはる)

(青山学院大学名誉教授・日本美術史)



平泉の地に仏国土(浄土)を築き、平和の思想のもとに都市づくりを進めた奥州藤原氏。その中で2代基衡が築いた円隆寺、3代秀衡が築いた嘉勝寺の本尊は薬師如来像といわれます。薬師仏による浄土も含め、多様な仏国土(浄土)を築こうとした奥州藤原氏の薬師信仰とその広まりについて、令和3年11月にオープンした平泉世界遺産ガイダンスセンター開館記念企画展の「赤沢七仏薬師」の魅力も含めて、「第2回平泉学フォーラム」において、基調講演をいただいた。

【略歴】

東京芸術大学 芸術学科を卒業後、同大学院修士課程を修了。

東京造形大学 非常勤講師等を経て、1979年から東京国立博物館 学芸部法隆寺法宝物室に勤務。その後同室室長を経て、1994年から青山学院大学文学部史学科 教授を務める。現在、同大学名誉教授。

2001年度～2010年度まで文化庁文化審議会(文化財分科会)専門委員を歴任。

【おもな著書・論文】

- ・「中尊寺彫像研究の現在」『佛教藝術』(2004年)
- ・「東大寺盧舎那大仏造立覚書」『佛教藝術』(2007年)
- ・「木造千手観音菩薩立像」『國華』(2009年)
- ・『慈善寺与麟溪橋-佛教造像窟龕調査研究報告-』科学出版社(2002年)
- ・『日本の時代史4・律令国家と天平文化』吉川弘文館(2002年)
- ・『平泉の文化史3 中尊寺の仏教美術-彫刻・絵画・工芸-』吉川弘文館(2021年)

第2回平泉学フォーラム 基調講演

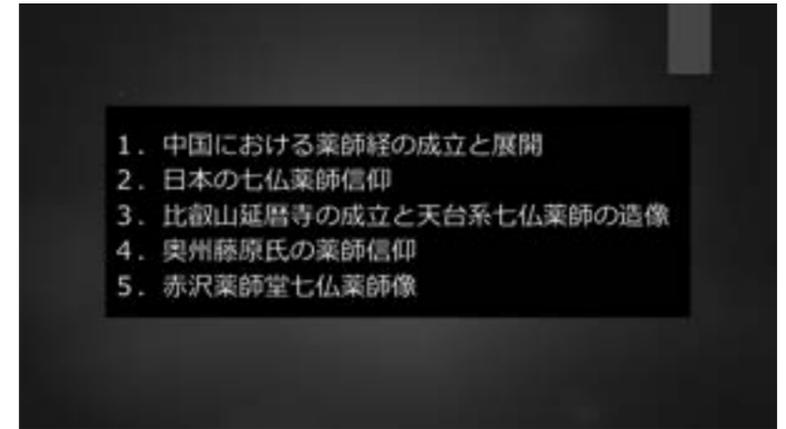
—奥州藤原氏の薬師信仰と赤沢七仏薬師像—

浅井 和春

皆さんこんにちは。只今御紹介いただきました浅井和春でございます。今日は奥州藤原氏の薬師信仰と赤沢七仏薬師像と題しましてお話をさせていただきます。

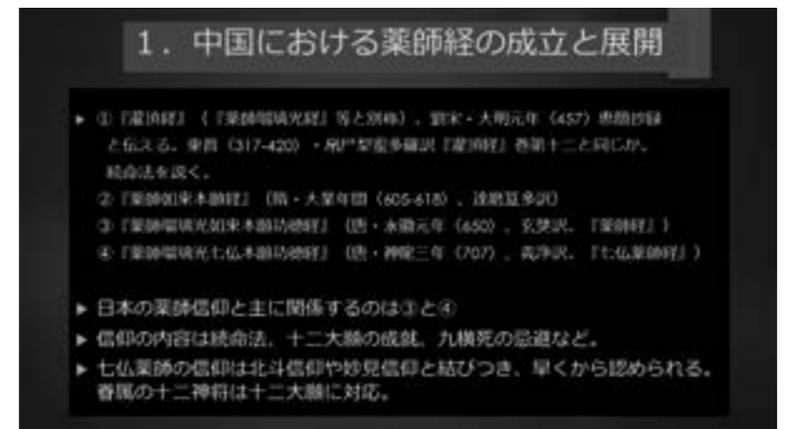
内容は1から5までですが、本題の奥州藤原氏の薬師信仰と赤沢七仏薬師像は4番目と5番目になります。

その内容を知るためにも、それ以前の、特に3番目の比叡山から始まる天台系の七仏薬師の造像という点が重要ですので、今日はそのあたりも少し詳しく述べていきたいと思っております。



1 中国における薬師経の成立と展開

これは前提の一つ、薬師経。薬師信仰の基本になる薬師経ですが、中国から始まります。古いものから1番、2番、3番、4番と、主なものがありますが、そのうち、日本の薬師信仰と直接結びつくのは3番の玄奘訳の薬師経と4番の義浄訳の七仏薬師経、これらはともに唐時代、650年と707年に訳されたものとして我が国に受け継がれて、受け入れられております。



信仰の内容に触れますと、続命法、亡くなる時お薬師さんに命長らえるために願うという修法、あるいは12の大きな願い、さらにはなぜか日本ではこれが一時流行するのですが、九横死=九つの邪な行いによって死をもたらされる、ということに対する防御が薬師如来には求められました。

七仏薬師の信仰は、もともとは北斗信仰=北斗七星の信仰と、妙見信仰、北極星の信仰ですが、それらと結び付けられ、中国では早くから認められるものです。

お薬師さんを守る眷属として、十二神将の存在も早くから考えられました。

簡単に中国の作例を見ておきますと、隋代、日本の聖徳太子の時代ですが、すでに中国では右のよ

うな絵画が描かれています。有名な敦煌莫高窟第302窟、あるいは417窟の絵画です。

左側は302窟の絵画ですが、これが薬師かどうかについては異論があるところですが、天蓋からちようど如来と菩薩の間に幡が下がっていますが、これを続命法の時に下げる幡と考えますと薬師の可能性もあるかと思われま



中国の作例
唐代⇒敦煌莫高窟第302窟（開皇四年・584）や第417窟など
出典：(302窟)『中国石窟 敦煌莫高窟二』（平凡社 1981年）図11
(417窟)『中国石窟 敦煌莫高窟二』（平凡社 1981年）図30

右側の如来と8人の菩薩、左右にいますが、これは明らかに薬師如来ということのようです。真ん中に続命法の時に灯明を掲げるのですが、その灯明台が表されています。この図像は薬師八大菩薩として著名なものです。

さらに、7世紀に入りますと莫高窟第220窟北壁にこのような7体の薬師が描かれています。今回の赤沢七仏薬師の源流ともいべきものといえま



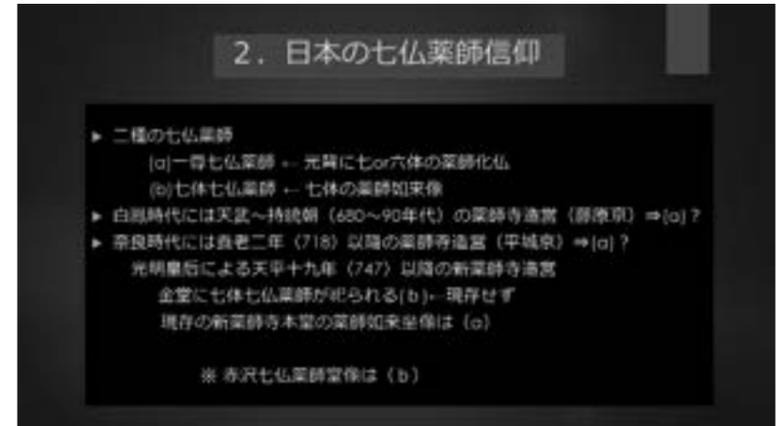
唐代⇒敦煌莫高窟第220窟北壁（唐・貞観十八年・642）
薬師立像七体＝七仏薬師之、頭部に十二支類を想ひける動物を頂く十二神将像を表現。
出典：『中国石窟 敦煌莫高窟三』（平凡社 1981年）図27

しょう。この薬師については、年代がはっきりしておりまして、唐の貞観16年（642年）の題記＝墨書が真ん中のお薬師さまの下の階段あたりに記されています。

中国のお薬師さんというのは鉢、お坊さんがよく持っているものですが、それから錫杖あるいは宝珠等を持つのが一般的ですけれども、日本のお薬師さんのような薬壺を持つものは知られておりません。日本独自の薬師とも考えられます。

2 日本の七仏薬師信仰

さて、日本に入っていきますが、日本の七仏薬師信仰というのは、最初はおそらく一体一尊の薬師であったでしょう。ただ、この一尊七仏薬師（a）は光背に七体あるいは六体の薬師の化仏（小さなお薬師像）をつけているというものであったかと推定されます。



2番目の（b）の七体七仏薬師、これも奈良時代にはすでに始まっておりまして、下のほうに書いてありますが、新薬師寺の造

営、光明皇后による天平19年（747年）以降に始まった造営ですけれども、その金堂の本尊が七体の七仏薬師ということが知られています。

このように、たいへん早くから七仏薬師あるいは一体の薬師の光背に薬師化仏をつけるという形が盛んとなっていたことが分かります。

赤沢七仏薬師は七体七仏薬師ということになります。

現存例を挙げておきますと、先ほどの、古くは白鳳時代の藤原京薬師寺とか、現在も奈良の薬師寺の金堂に祀られている薬師如来、有名な、日本を代表する仏像の薬師如来、こういった仏像一形はお釈迦様と同じ通仏相と申しますが一同じ形で、光背についた化仏もおそらくそのような薬壺を持つたりしない普通の一般的な如来の形であったと思われます。それに対して、はっきりと薬壺を持つ形が行われるようになるのは奈良時代後半からだろうと考えられます。ここで掲げました新薬師寺本堂の一尊七仏薬師、先ほどの金堂の七体七仏薬師ではなくて、新薬師寺の端のほうに建てられたお堂、本堂の一尊七仏薬師、これが光背に六体の化仏をつけています。

平安時代に入りますと、有名な岩手県黒石寺の薬師が挙げられます。レジュメでは会津の勝常寺をあげましたが、勝常寺の光背化仏はどうも薬師ではなく、飛天のような形をしていますので、黒石寺のほうがおもしろいと思います。

こちらは光背についている化仏7体がすべて古いものなので、この貞観4年（862年）という製作年代も知られている像に一尊七仏薬師という形が表れています。（図は省略）

3 比叡山延暦寺の成立と天台系七仏薬師の造像

少し急ぎましたが、肝心の天台系の七仏薬師のことに触れておきたいと思います。

比叡山延暦寺の薬師です。今、中尊寺さんも天台宗ですが、古くから東国の、あるいは奥州の仏教に強い影響を及ぼしたのは、慈覚大師円仁以来の天台宗だと思われまふ。その出発点が延暦寺から始まることは言うまでもありません。

この延暦寺、最澄が延暦7年（788）に建てたものですが、史料によれば一上のほうに『山門堂舎記』という史料を挙げておりますが、レジュメにもあげておきました—ここに本尊は虚空蔵尾（こくうぞうのお）の倒木で造った伝教大師自刻の薬師仏と書いてあります。これが根本本尊となります。

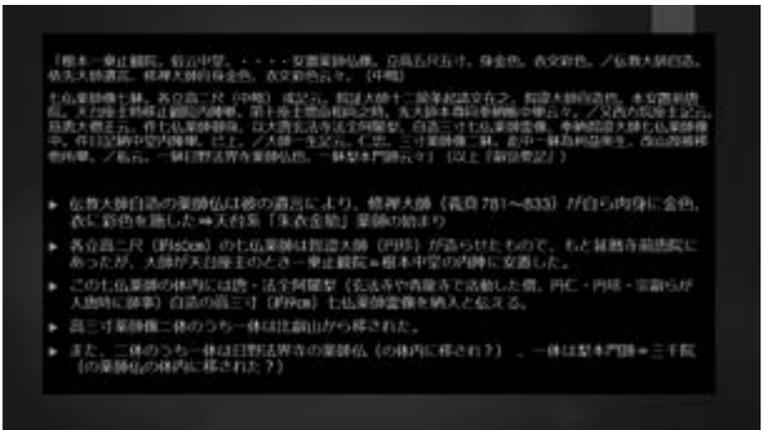
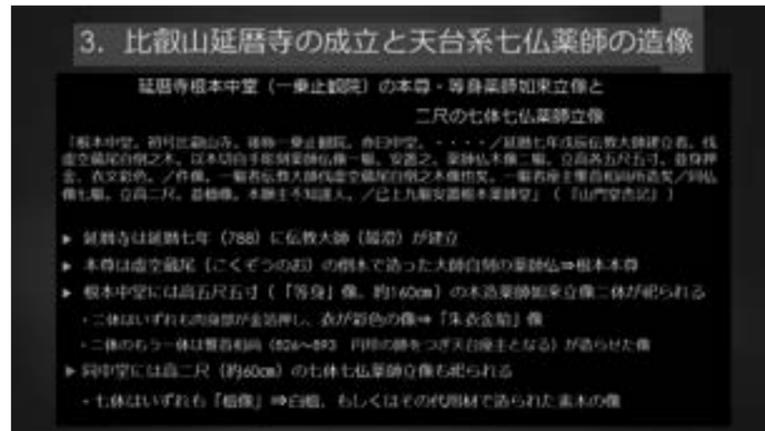
もう一体の等身五尺五寸像—最澄自刻の像も五尺五寸像と書いてありますが—それは円珍の跡を継いだ偉いお坊さんの唯首和尚が造らせたお像、それも根本中堂に祀られたということが、史料には書いてあります。

さらには、この中堂のおそらく厨子内ですが、高さ二尺、約60cmの七体七仏薬師像の存在も認められます。この七体はいずれも「檀像」と記されております。「檀像」というのは白檀、お香の材料にする白檀ですが、それかその代用になる木、日本では榿材、桜材、あるいはおそらく桂材もその代用材の一つだったと考えられます。

もう少し詳しい内容が、『叡岳要記』という史料に記されています。この史料はレジュメにも挙げています。

この伝教大師の薬師仏は、彼の遺言により、弟子の修禪大師—2代目の天台座主になった義真—が自ら肉身に金色、衣に彩色を施した。この彩色というのが、実物（他の天台系薬師仏のそれ）を見ますと赤く塗っていますので、これが天台系の朱衣金胎薬師の始まりということになります。

一方、二尺の七体七仏薬師は、智證大師（円珍）が造らせたもので、もとは延暦寺前唐院に祀られていたのですが、大師が天台座主になったときに一乗止観院、根本中堂のことですが、その内陣に安置したと書いてあります。



この七仏薬師の体内には、中国・唐の法全阿闍梨が自分で作った高さ三寸、9cmくらいの七仏薬師の靈像を体内に納めたとも書いてございます。

法全というお坊さんは、円仁、円珍、宗叡らが中国に行ったときにお世話になったお坊さんのようです。

また、史料を見ますと、三寸の体内に入れたという薬師ですが、二体のうち一体は比叡山から移されたとも書いてあります。文章自体はよく省略がありますので、補っておかなければいけないのかもしれないかもしれませんが…。

その後、二体のうち一体は日野の法界寺—京都・日野のお寺です—の薬師仏、一体は梨本門跡—これは京都の大原三千院です—の薬師仏と書いてありますが、小さい像ですから、体内に移されたと考えてよいでしょう。

今回はこの日野の薬師も注目しておきたいと思います。

日野の薬師については、昨年の末から東京で始まって、もう少しで福岡展が始まり、京都へと巡回する「最澄と天台宗のすべて」展の目玉として、話題を呼びました。

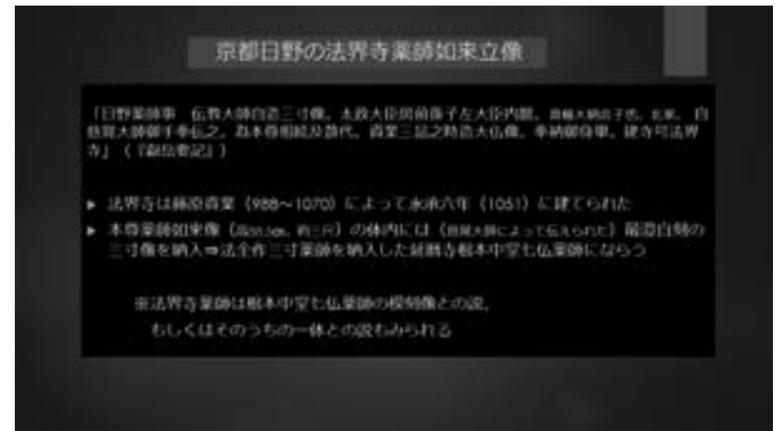
この薬師は、『叡岳要記』に見えますように、藤原北家系統の資業が平安時代の永承六年（1051）に京都の日野に建てたお寺の本尊であったと考えられています。製作年代的にもこの1051年という年代がびたりというわけです。

その時、本尊の体内に伝教大師が自ら作った三寸像を納めたと書いてありますが、これは、根本中堂の七仏薬師体内に納められた中国の法全阿闍梨作の三寸像の納入に倣ったものであろうと思うわけです。つまり、法界寺の薬師は根本中堂七仏薬師と非常に密接な関係にあり、先の史料でも挙げていますが、最近ではその模刻像ではないか、とか、あるいは、藤原時代に新たに作られた七体薬師—比叡山は何回も火事にあっておりまして、10世紀代にも全部燃えておりますので、藤原時代に再建されておりますけれども、おそらくその時に作られた七仏薬師—のうちの一体だという説も見られます。まあ、よくわかりません。

この図（省略）が日野の薬師、法界寺の薬師に納められた胎内仏の様子です。最近ではX線画像でこのような写真も撮れるようになってございまして—実際にはこの像が江戸の像であることは、修理の時に一回出されておりますので分かっていたことですが—今回新たな技術でこのような写真がインターネット上にも発表されて、話題を呼んでおります。

この薬師、本当に延暦寺系の「檀像」七仏薬師と言えるのかと申しますと、このアップの図は素木の素地に截金という、金箔を細く切つて文様にしたのですが、この素地截金ということで、素木だけでは寂しいので截金彩色も施したということになるのでしょうか。

そのようなことで、もともとは素木、そして藤原時代にはその素木に截金という像が生まれたとい



うことでしょう。「檀像仕立て」ということで間違いはございません。

4 奥州藤原氏の薬師信仰

さて、奥州藤原氏の薬師信仰に入っていきたいと思えます。

『吾妻鏡』文治五年

(1189) 九月条の「寺塔已下注文」、有名な文治注文と言っているものですが、そこには毛越寺の金堂一円隆寺と申しますけれども一を基衡が建立して、本尊は丈六薬師如来像であったと。その像は京都

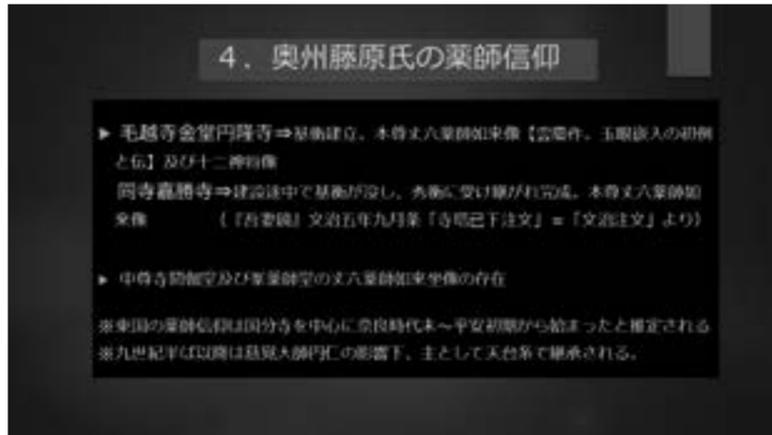
に注文して、雲慶という仏師に注文した。有名な運慶・快慶が出てくるのはもう少し後ですので、伝説かと思いますが、見逃せないのが「玉眼嵌入の初例」という文言です。鎌倉時代に入りますと運慶・快慶の像にたくさん目に水晶を入れる玉眼というのが流行しますが、毛越寺が建てられた12世紀の中頃、この時にはすでに玉眼というのが始まっていた。実際の作品でもそういう作品が何点か知られています。

毛越寺ではもう一つ、嘉勝寺というお寺、お堂といったほうが良いのでしょうか一円隆寺の隣にその遺構が残っていますが一その嘉勝寺の本尊も丈六薬師如来像ということが、先ほどの文治注文中に記されています。

この嘉勝寺像については、建設の途中で基衡が没し、秀衡に受け継がれたということも記されておりますので、このあたり、年代的には基衡が亡くなるのが1160年前後と考えられますが、この像もそれ以降、1170年くらいまでの像というのも明らかです。

円隆寺と嘉勝寺の二体の丈六薬師像、これが奥州藤原の薬師信仰を代表するものであることは言うまでもありません。残念ながら、これらの像については、その後、毛越寺が衰えた後、お像も失われてしまったと考えられています。

けれども、中尊寺さんを見ますと、讃衡蔵に入るとすぐに丈六の薬師像2体と丈六の阿弥陀像1体、計3体が安置されています。この関伽堂薬師および峯薬師と言われる2体の像が、中尊寺の古い史料には出てまいりません。何らかの事情で或る時期に中尊寺に移されたと考えることも可能かと思われま。



出典：(峯 薬 師)『中尊寺』(中尊寺 2010年)図27
(関伽堂薬師)『中尊寺』(中尊寺 2010年)図26

毛越寺の像というわけではありませんが、様式をちょっと見てみますと、右側の関伽堂の薬師一関伽薬師と言っている像ですが一この像が様式的には、基衡時代のものだろうと私は考えています。左側の峯薬師、こちらは間違いなく秀衡時代の薬師です。顔立ちなどは次に述べる赤沢の七仏薬師とちょっと似た感じでもあります。

このような、時代をちょっと違える一そんなに大きな違いではありませんが一10年か20年違うお像の存在。これと、先ほどの毛越寺の円隆寺あるいは嘉勝寺の丈六薬師の存在というのが、個人的には昔から引っかかっておまして、まあ、それ以上は史料が無いので単なる想像かもしれません。

少し前に戻りますが、東国の薬師信仰はまず国分寺を中心に奈良時代末、平安時代初期に始まったと推定されます。なぜか国分寺に薬師如来が作られる例が多くあります。9世紀半ば以降になると、慈覚大師円仁の影響で主として天台系、東国の天台系で継承されていったのではないかと。ということでございます。

5 赤沢薬師堂七仏薬師像

赤沢の薬師堂の七仏薬師に入っていきたいと思えます。

この紫波町東部に位置する赤沢薬師堂ですが、明治初年の廃仏毀釈以前は蓮華寺という名の寺院に属しておりました。

このお寺が奥州藤原氏の北の拠点となった比爪の藤原氏と密接な関係にあったという点につきましては、今回の世界遺産ガイダンスセンターのオープン展に際してまとめられた冊子に詳しく述べられております。左側の冊子ですが、これはお求めになりたい方は、申し込めばということのようです。蓮華寺あるいはその赤沢薬師の薬師信仰そのものにつきましては、そちらをぜひご覧いただければと思っております。

近くの正音寺には、11世紀前半頃の毘沙門天像と同じく後半頃の四明王一五大尊中のお不動さんを除いた4体、これら重要文化財が残されておりますが一も蓮華寺伝来のものと知られております。



では、赤沢七仏薬師に入っていきたいと思いますが、右の図をご覧ください。

この七仏薬師につきましては、住友財団や県の助成によって、2015年から4年間、明珍素也さんが主宰する東京の明古堂で修理が行われました。私もその監修のお手伝いをさせていただきました。ご覧のように右側が元のお姿、そして左側が現在の修理後のお姿です。



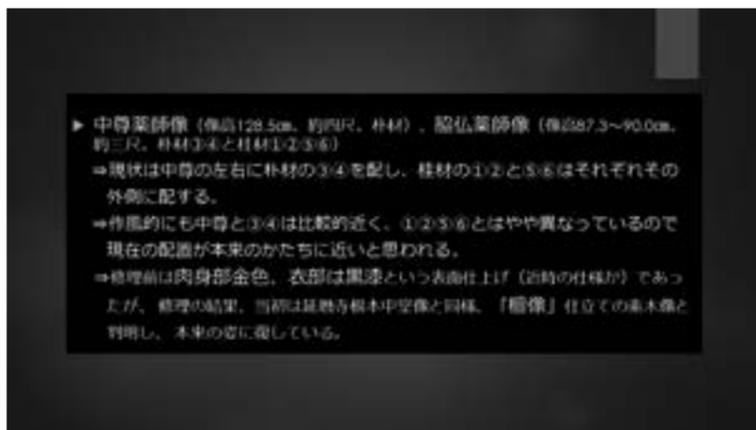
元の（修理前の）お姿は、肉身部が金色で、衣に黒漆—この黒漆のうゑに朱色を塗るのがその意図だったかもしれませんが—このようになっていました。

ただ、修理では、ちょっと表面の状態が良くないので剥がしてみましたところ、下地はごく新しいもの、幕末～明治くらいのものでした。

では、本来はどうだったかということで、古い下地を探したのですが、全く見つかりませんでした。したがって、図の左側のような完成の形に至ったわけです。

先ほどの、根本中堂に高さ二尺の檀像の七体薬師が祀られたまさにその比叡山系、天台系の七仏薬師として、本来、素木の形が正しいのだということで、地元の方々にもご理解、ご了解をいただきまして、この形となった次第です。

で、この薬師像、大きさは約四尺、脇仏は三尺。問題は材質です。中尊を調べましたら、以前は桂（カツラ）と思っていましたが、実は朴（ホウ）の木だったことが分かりました。



脇仏のなかにも2体、朴の木の仏像がございました。残る4体が桂の木でした。この区別は何なのだろうかと考えましたところ、どうも作風を見ますと中尊とよく似ているのが、朴の木の③と④で、桂材はそれよりもちょっと違う作風かな、ということが、何人かで検討したところ明らかになりました。このことをございまして、地元の方々の了解を得、町の教育委員会の担当の方とも相談しまして、並び方をちょっと以前とは変えてみました。

以前の並び方は、右から一図の下のほうが今の並び方ですので、その番号で言いますけれども—①と②がそのままです。その隣、向かって右の一番本尊に近い位置が⑤になります。③と④は左側のところに2体並びます。この像が朴の木だったのです。一番左端が⑥となりますので、⑤と③④をずらして、現在のような形となりました。

こちらの像—後ほど作風もコメントしたいと思いますが—（上図の）向かって右側③ですが、ちょっと右に振れているといいえますか…、本尊もちょっと右に振れている感じなのです。同じく左側の④の脇仏も右に振れている。この辺りは、材の曲がり具合に合わせたのか、仏師がそのような作ってみたかったのかは分かりませんが、よく地方の仏さまにはある傾向です。



こちら（下図）が桂材の4体です。それぞれ違う顔立ちをしておりますので、何人かの仏師がいたのだらうという気はいたします。



先ほど、中尊寺の峯薬師が秀衡時代の顔立ちと申し上げましたが、おそらくこの一番左の⑥の顔立ちなどはそれに近いかと。ちょっと見た感じ、あまり差はなさそうですが、よくよく比べますと、そのようなことが言えるのではないかと思います。

さらに、構造です（右図参照）。中尊ともう一体が体部に内刳を施しております。それ以外は内刳の無い一木造ということになります。



では、なぜこのような内刳を施したのかというと、単なる重さを軽減するとか、そういったことではなく、中に何らかのものを納入した。体内に入れるために、このような構造になったと考えられます。

先ほど、日野の薬師が体内に入っている画像をお見せしましたが、この像についても、ちょうど体内に仏像が入っていれば、それが一番ふさわしいかと。これも単なる想像です。

そんなことで、朴の木と桂材とございますが、最近、朴の木の仏像がぼつぼつと確認されるようになってきています。今まで桂と思われていた仏像も、これからは朴なのか、桂なのか、それをきちんと樹種同定で見極めなければならない時代に入ったということになるかと思えます。

さて、レジュメの方に文章を少し入れておきましたが、この赤沢薬師像の作風です。いずれも大仏師定朝によって確立された和様、平安後期の貴族たちの嗜好に沿った繊細な作風を示しています。しかし、本七仏薬師は中央の作例に顕著なバランスの取れた雅やかなそれとは異なり、表情にはやや鄙びたところもみられる。それ自体は都会風がよくて、地方風がダメということでは決してなく一私自身は宮城県の松島の出身ですので、地方が大好きですが—そういう違いがあるということをご認識していただければと思います。

では、中央作にはどのようなものがあると申しますと、(右図の)左側が京都・宇治白川の金色院伝来と伝えられる、やはり宇治の地蔵院に今所蔵される阿弥陀如来像です。こちらと比べますと、明らかに作風に差があること、違いがあることはお分かりいただけるかと思えます。



出典：(地蔵院像)『特別展 院政期の仏像—定朝から雲慶まで—』(京都国立博物館 1991年) 図17

ということで、(右図は)現在の七仏薬師のお姿です。比叡山延暦寺根本中堂の七仏薬師、その伝統を継承した「檀像仕立て」の像で、現在はあまり残っておりませんが、七体七仏薬師の作例として、これから、もっともっと重要とみなされるようになっておきます。



七体七仏薬師の類例としては他に、今のところ、2セットが知られています(図は省略)。まず千葉県松虫寺の七仏薬師、これは中尊が坐像です。松虫寺というお寺が面白いのは、聖武天皇の娘、不破内親王が病気を治すためにこの千葉県の松虫寺のところまでやってきて、お薬師さんにお祈りしたら病が治った、という伝説のある像です。製作年代は赤沢七仏薬師よりは少し下る、平安末、鎌倉の頃かと考えられます。

もう一セットは鶏足寺の七仏薬師です。こちらは琵琶湖の東、昔は木之本町といったのですが、今は長浜市のお堂に伝来した七体七仏薬師です。

この鶏足寺には、近辺の立派なお像がたくさん集められておりまして、収蔵庫2つにびっしり、

平安時代や鎌倉時代、あるいは近世の像が並んでおります。地元の人たちが大切にお守りしているお像ですが、その中に七仏薬師も含まれております。

この鶏足寺像については、近年、年代にいろいろな考え方が示されておりまして、私自身はあまりきちんと考えたことはありませんが、東京国立博物館の方の論文では、真ん中が平安時代で、他は平安時代末から鎌倉とか、あるいは一番左側の1体は、室町時代の作だと言っておりますが、よく分かりません。

まとめ

以上、今回この七仏薬師、赤沢七仏薬師にちなみ、改めて、日本の薬師信仰のことを天台系の薬師とともに考えてみました。

まとめますと、日本の薬師信仰は、中国朝鮮の影響下、7世紀から始まりました。

古い薬師としては、先ほどの藤原京薬師寺以外に、法隆寺金堂のお薬師様も7世紀ごろの作品として最近改めて注目されています。

一尊七仏薬師や七体七仏薬師の造像は奈良時代にも認められます。平安時代の薬師信仰は最澄が始めた延暦寺根本中堂の薬師から始まり、天台系薬師として東国に伝えられた。

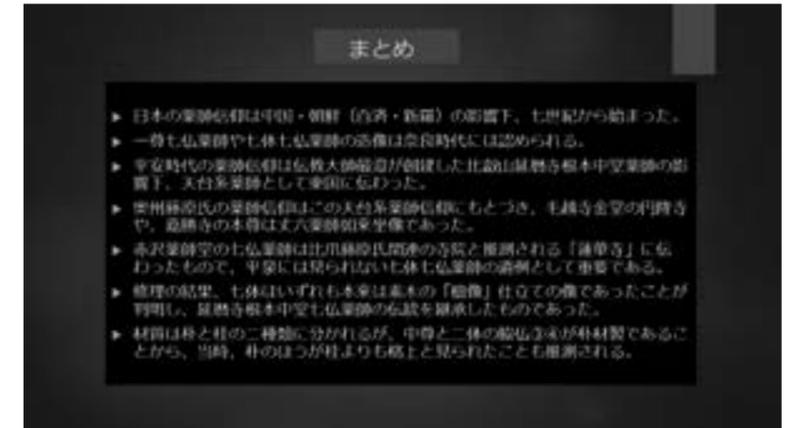
奥州藤原氏の薬師信仰は、この天台系薬師信仰を基盤として、毛越寺金堂の円隆寺や嘉勝寺の本尊に丈六の薬師如来坐像が作られた。

赤沢薬師堂の七仏薬師は、比叡山藤原氏関連の寺院と推測される蓮華寺に伝わったもので、平泉には見られないというか、残っていないといえますか、七体七仏薬師の遺例として重要である。

修理の結果、七体はいずれも本来は素木の「檀像仕立て」の像であり、延暦寺根本中堂七仏薬師の伝統を継承したものであった。

材質が今回明らかとなった朴と桂の2種類に分かれるということも、今後、日本の仏像史のうえで注目される重要な点と考えられるでしょう。

一気にお話ししましたが、以上が私の今回の赤沢七仏薬師と関連したスピーチでございます。長時間にわたってのご清聴ありがとうございました。



II 研究報告

研究報告1 平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究

(その二) 地域全体を見る—山西省の寺観建築の立地について

岡田 健

はじめに

平泉における金鶏山の位置づけは、無量光院から西方を見やるときの「彼岸」としての姿のみならず、柳之御所遺跡の発掘成果によって、さらに政庁平泉館からの一直線上にあるものとして、その重要性を増している。

藤原清衡・基衡・秀衡三代による平泉の継続的な都市建設については、前川佳代氏によって以下のように整理されている。

A期（清衡期）：柳之御所が建設され、そこから北西へ中尊寺に向かう道路が拓かれ、これを中心線とした段階

B期（基衡期）：少し南に下がって毛越寺が造営され、東西大路の開通と南北通路の構想という都市建設が進められた段階

C期（秀衡期）：柳之御所を中核点として南西方向へ14度斜めに振って東西大路への道路が開かれた段階



(前川佳代 2010「都市史の中の平泉—都市のかたちから—」『平泉文化研究年報』第10号から転載。赤線は筆者) これをもとにすると、筆者には、当然ながら柳之御所は常にその中核としてあり、そして金鶏山こそはその真西の方角に鎮座する不動の存在であったように見えるのである。これを「基準線」と見なせば、この柳之御所と金鶏山の関係こそが不変であったと理解できるように思う。

筆者は、昨年度の研究会において、中国山西省太原市西郊の龍山北峰の山腹に位置する北齊時代(6世紀半ば)創建の童子寺遺跡に関して、晋陽古城を下界に臨む童子寺の立地条件という観点から、当時の人びとがその景観を見たという記録を通じて紹介した。そのことを例として、金鶏山を「西方浄土をイメージするための装置」として見るだけでなく、むしろ山を主体として、山とそこから展望されるまちとの関係で見る、ということを考えてみた。

2年目となる今年度は、ふたたび、多くの古建築が残る山西省に焦点を当てることにする。

それは、童子寺のような廃寺跡や山間に放棄された石窟寺院とは異なり、地上にあっていまでも活動を続けている仏教寺院や道観を含んでいる。中にははるか古代に創建されて、何度かの危難と再建を経てきたものもある。今回のキーワードは、「やまとまちと寺院」である。

1 中国山西省の古建築の分布状況

山西省は、現在でも唐宋時代から元明清、中華民国時代にいたる、数多くの多様な建造物文化財が残っている。2019年10月の段階で、中国で全国重点文物保护单位(日本の国指定文化財に相当)に指定されている建造物文化財(古建築)は2,160か所に上るが、山西省だけで424か所を数えている。さらに省レベル、市レベルの文物保护单位がある。

中国の古建築は、躯体の骨格や屋根の構造は木造であるが、壁体はほとんどレンガで作られている。その中で特に多いのが、寺観(仏教寺院及び道教の道観)建築である。寺観建築では、建物が残っているため内部の壁に描かれた壁画と彫像が残っている場合が多い。そして、現存する彫像のほとんどが粘土を用いた彩色塑像であることが大きな特徴である。山西一省だけで約12,000体の塑像が残っているとされるが、そのほとんどが古建築とともに残ってきたのである。

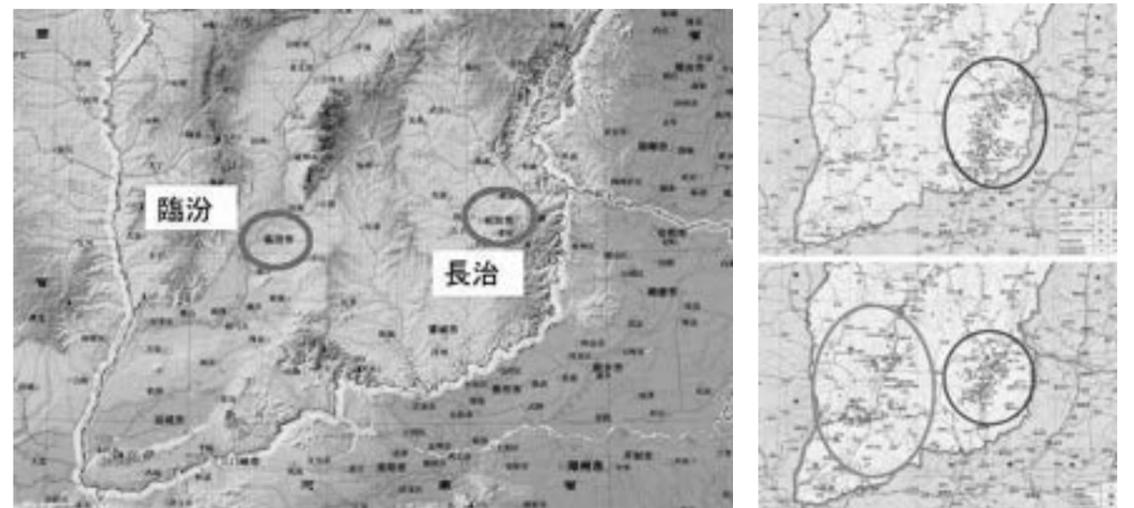
また、山西は「中国戯曲揺籃」の地といわれ、古来各地で戯曲が盛んにおこなわれた。その戯曲のための舞台建築(中国語では「戯台」)も数多く残っている。15年前の統計では、金元時代の戯台が2,854、明清時代の戯台が2,537残っているという。これは地域の芸能、人びとの四季折々の暮らしと密接に結びつくもので、往時の活気を偲ばせる重要な資料である。

山西省に現存するこれら古建築全般の分布状況を見ると(『中国文物地図集/山西分冊(上)』)。

1) 唐時代から宋、遼、金まで(8世紀~13世紀前半)は、省中部から北部の太原市、大同市という古都や五台山一帯、さらに太原から東南に太行山脈を越えて現在の河北・河南へ抜けるルートに沿った山間部、現在の長治市周辺に集中している。

このルートは当時の交通の要路であり、沿線にはまちが経営された。

2) 元時代以降(13世紀後半以降)になると、長治市周辺以外に、太原市から南方に向かって黄河に注ぐ汾河に沿った平野部、現在の臨汾を中心とした地域に古建築が残っている。



(上) 唐宋遼金時代の古建築(長治周辺に集中して残る) (下) 元時代以降の古建築(長治周辺と臨汾周辺に残る)

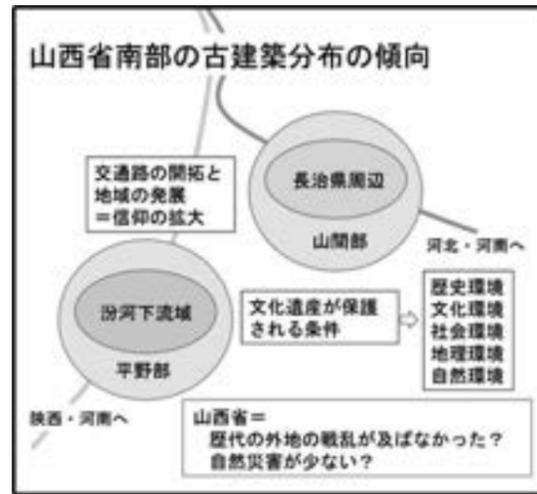
このように、時代とともに交通路経営の重点地域に変化があり、それが現在の古建築の分布状況にも反映しているのである。

2 山西の地理的環境

山西の地域は、東に太行山脈を臨み、西に黄河が流れるという地理的環境により、周辺の地域(陝西・河南・河北など)の戦乱の火の粉が山西にまで及ばなかったことが考えられる。しかし、山西で

も歴代争乱は発生している。どうしてこれほどまでに古建築が残っているのだろうか。

当然、寺観建築や戲台などは、宗教的根拠と地理的環境などの理由によって場所が選ばれ、建造され、その場所で現代まで維持されてきた。もちろん、戦乱や自然災害によって失われたものも多いが、こんにちまで残ってきたことにも理由があり、それぞれの歴史的・文化的・社会的・地理的・自然的環境等が好条件として働いた結果なのである。

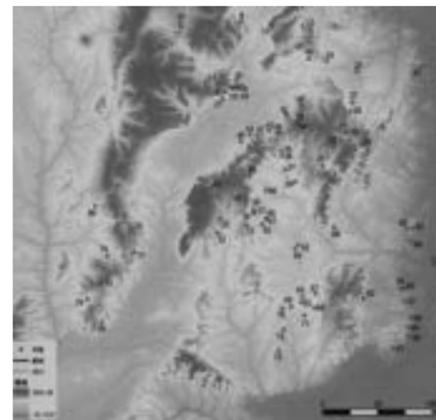


その中でもとりわけ重視すべき条件は、汾河を通じた水運、長治を経由する河北・河南への陸運など、交通路によって往来する権力者や商人たちの存在、すなわち経済的環境であったに違いない。

交通路の繁栄はまちの繁栄につながり、寺観への支援がどの時代を通じても途切れることがなかったため、唐時代に創建された寺院がその命脈を保ち続けることができた。人びとの暮らしが何代にもわたって継承され、戯曲などの文化的な活動も継承されてきた。

3 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例

1) 長治周辺



山西省南部の石窟寺院分布

山間部に位置する長治を中心とした山西省東南部の一帯は、かつて東魏の宰相にして次の北齊の皇帝となった高一族の本拠地である太原と太行山脈を越えて東に鄴都（現在の河北省邯鄲の南）とを往来するための、あるいは南に河南洛陽に向かうための道があり、まさに陸路の要衝であった。

この一帯では、北魏以来の仏教石窟寺院も数多く作られている。もちろんそれらは、街道のまちから少し離れた山の中にあり、人びとの暮らしの場と信仰の場がここでは山によって分けられていた。同様に、この地域に建立された仏教寺院は、多くが背後に山の景観を持っている。

〔長治周辺の仏教建築寺院の例—平順県大雲院〕



長治市平順県所在の大雲院は、双峰山の南麓に南に門を構えてあり、五代・後晋の天福3年(938)の創建になる。金元時代に大きく破損したが、明清に数度の復興があった。中軸線に沿って南から天王殿・大仏殿・三仏殿が配置されている。天福5年(940)建立の大仏殿には、中国で唯一の五代の寺観の壁画が残る。寺外の西南50mに五代の七宝塔がある。全国重点文物保护单位。



大雲院全景



大雲院衛星写真 (Google マップから引用)

〔長治周辺の仏教建築寺院の例—平順県龍門寺〕



大雄宝殿 (北宋時代)

長治市平順県所在の龍門寺は、北齊の創建と言われ、平順県石城鎮源頭村の龍門山麓にある。建築群は南に面して建っている。五代の後唐、宋、金に規模を拡大し、現在も五代、宋、金、元、明、清の建築が残る。山門(天王殿)は金代の建築。西配殿は現存する唯一の五代の「懸山式」建築。東配殿は明代建築、中殿(大雄宝殿)は北宋建築、後殿は元代建築。1996年、第四批全国重点文物保护单位。

2) 汾河平野部

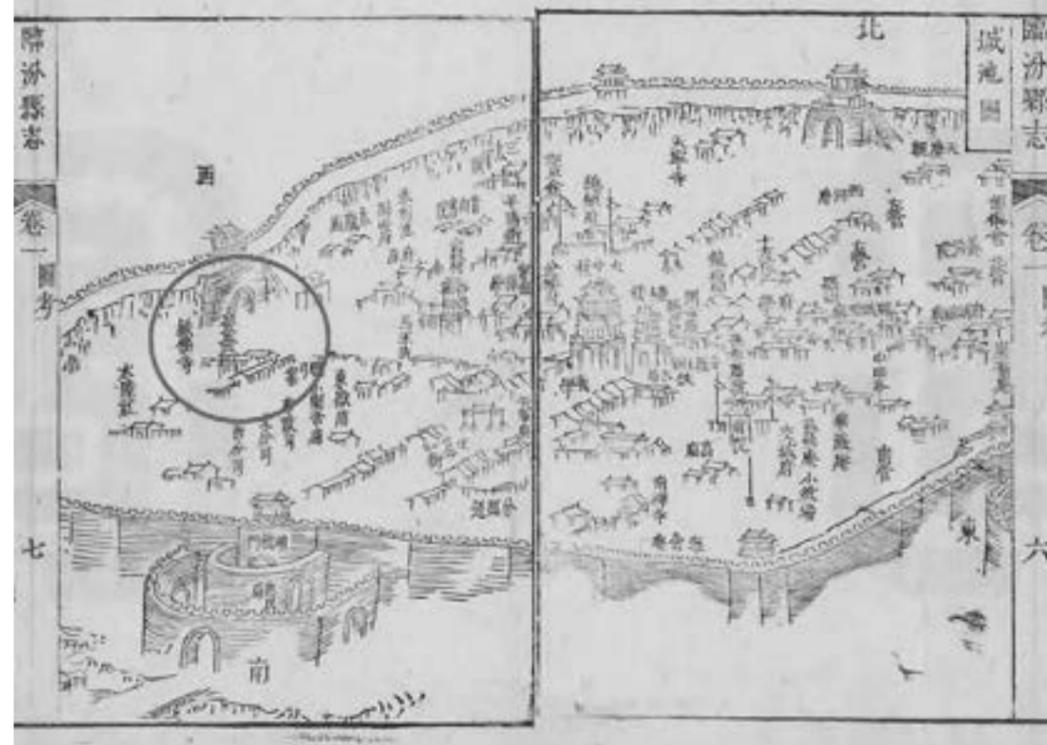
北から流れる汾河は臨汾を中心とした盆地の平野部にいたる。

この場所は、古くから中国文明発祥の地と言われ、かつて平陽と呼ばれて「堯舜禹」の三代が都を置いたとも信じられていた。汾河の南北のみならず東西への交通の要衝でもあった。このため、歴代ここは山西有数の都会として栄えた。古建築の残存は、やはり激動の歴史を反映したものか山間部に比べると唐宋遼金時代のものは少ない。元時代以降の古建築が他に比して多く残るのが特徴である。

〔汾河平野部の仏教寺院建築の例—大雲寺（鉄仏寺）〕



旧臨汾県故城は、いまはかつて中心にあった鼓楼と東西南北の大通りが名残をとどめているにすぎない。大雲寺（鉄仏寺）は唐・貞観6年（632）の創建と言われ、清・乾隆44年（1779）の『臨汾縣志』の「城池図」に城の西南角にその塔が描かれている。京都大学人文科学研究所『山西古蹟志』所載の臨汾城内の写真（昭和15年12月撮影）にも清時代の塔と伽藍を展望することができる。まさに平野部に築かれた都城の寺院の姿である。



清乾隆四十四年『臨汾縣志』城池図



京都大学人文科学研究所『山西古蹟志』所載写真



現在

4 おわりに

京都・平安京が中国の都城に範を取りながら、羅郭（城壁）を設けず、東西と北は山岳にその役割を担わせたことはよく知られている。

唯一城門を設け塀が築かれた南面は、中央の門（羅城門）を挟んで東寺・西寺があつて国都を鎮護し、城内には各種の神社が勧請され、国家安寧から怨霊調伏まで、さまざまな役割を担った。また東北の方角には延暦寺の比叡山が鎮座するという絶妙の配置があつた。東山・北山にもその後多くの神社仏閣が建立された。南禅寺の山門から石川五右衛門が「絶景かな」と叫んだという創作は、都を眺望する場所に建てられた寺の性格をよく示している。



いっぽう、東山三十六峰のひとつ阿弥陀峰は、その山麓と鴨川の間には現在は六波羅密寺、知恩院、智積院などの寺院が残っているが、古代においてこの一帯は「六波羅」から「鳥辺野」と呼ばれる葬送地へつながる場所であつた。「やま」が人々のくらす空間と異界とを隔てる、あるいはつなぐ、重要な役割を果たしていた。

山西省の寺観建築にももちろんさまざまなパターンがある。今回は、他の地域に比べてはるかに多くの古建築が残るこ

の地域の状況を通して、

- ① 人の往来とまちの形成、その盛衰が、寺院の存廃に如実に反映されていること。
- ② 平地のまちにある寺院に対して、やまの中に建立された寺院は通常は山と一体となることを意識しており、人びとがその空間に足を運ばなければ、まちとの距離を実感できないことに注目した。

このような観点をもって改めて平泉を考えると、金鷄山という「やま」が、柳之御所を中心とする平泉の「まち」づくりにおいて実ははじめからその基準点として存在し、また両者の関係が基準線として機能し、その設定の中で、毛越寺、そして無量光院の造営が企図されていたのではないかと、いうことに考えが及ぶのである。

まず「やま」と人びとが暮らす「まち」があり、そこに寺院が建立されて、平泉の「此岸と彼岸」はまさに現世のものとして実現されたのである。筆者は、「まち」の暮らしが「仏国浄土」そのものとして、一体感を体験するものになるのではないかと考えるのである。

ただし、果たして設計者である藤原氏がそこまで意識していたのか。最初期の北西に向かう中尊寺の建立に際してもすでにこの基準線は意識されていたのか。そして「まち」の人びとがそこまで理解していたのか。このことはもちろん、まだ、想像の域を出るものではない。

【 参 考 文 献 】

前川佳代 2010 「都市史の中の平泉—都市のかたちから—」(『平泉文化研究年報』第10号)
 水野清一, 日比野丈夫 1956 『山西古蹟志』京都大学人文科学研究所研究報告
 中国地図出版社 2006 『中国文物地図集/山西分冊(上)(中)(下)』

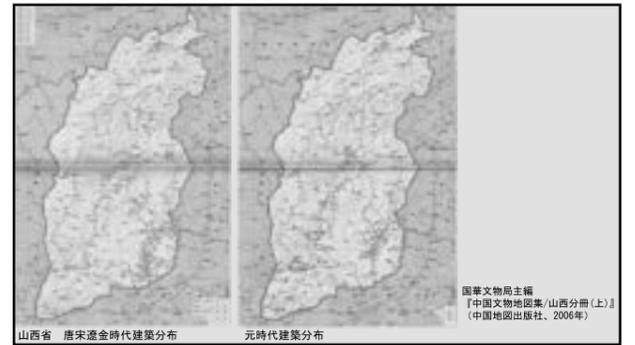


はじめに

- 昨年度の提案
 - ◆金鶏山の意味について
 - 「西方浄土をイメージするための装置」として見る
 - 山を主体として、「山とそこから展望されるまちとの関係」で見る
 - ◆山から下界を見る＝「視点」を変える
 - 仏陀の空間に登り、自分たちが暮らす城を見る
 - ◆一体感を体験することになるのではないか？

1. 中国山西省の古建築の分布状況

- 山西は「中国戯曲揺籃」の地といわれ、古来各地で戯曲が盛んにおこなわれてきた。
- その戯曲のための舞台建築(中国語では「戯台」)も数多く残っている。
- 15年前の統計では、金元時代の戯台が2,854、明清時代の戯台が2,537残っているという。
- これは地域の芸能、人びとの四季折々のくらしと密接に結びつくもので、往時の活気を思わせる重要な資料である。



●平泉における金鶏山の位置づけ

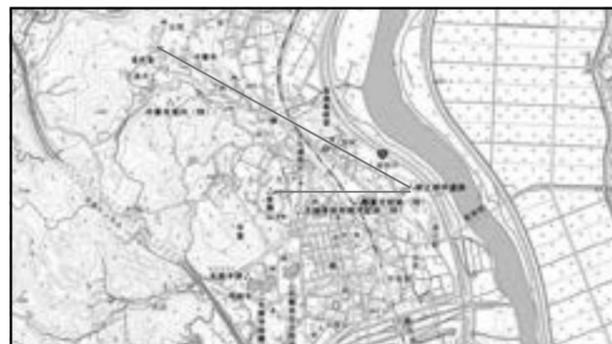
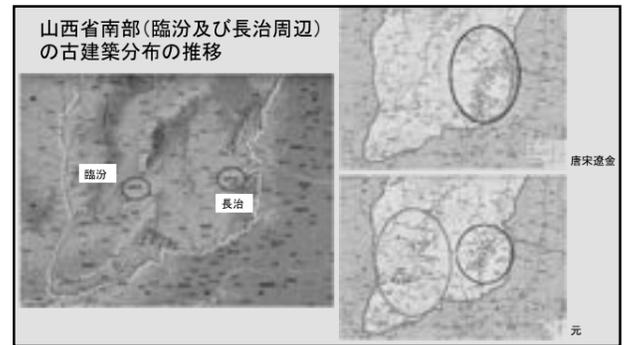
- ◆藤原三代による継続的な造営
- A 清衡期 柳之御所-中尊寺という北西へ向かう線を中心線とした段階
- B 基衡期 少し南に下がって毛越寺の造営、東西大路の開通と南北通路の構想という都市建設の段階
- C 秀衡期 柳之御所を中核点として南西方向へ14度斜めに振って東西大路への道路が開かれた段階

前川佳代「都市史の中の平泉-都市のかたちから-」(『平泉文化研究年報』第10号、2010年)から引用

- ◆常に平泉の中核としてある柳之御所
- ◆その真西の方角に鎮座する不動の存在としての金鶏山
 - これを「基準線」と見なせば、両者の関係こそが不変であった。
- 2年目の検討
 - 「やまとまちと寺院」という視点で平泉を見る
- ◆平泉はどのようなイメージでつくられたのか？

山西省南部(臨汾及び長治周辺)の古建築分布の推移

- 唐時代から宋、遼、金まで(8世紀～13世紀前半)
 - 省中部から北部の太原市
 - 大同市という古都や五台山一帯
 - さらに太原から東南に太行山脈を越えて現在の河北・河南へ抜けるルートに沿った山間部、現在の長治市周辺に集中している。
 - このルートは当時の交通の要路であり、沿線にはまちが経営された。
- 元時代以降(13世紀後半以降)
 - 長治市周辺以外に、太原市から南方に向かって黄河に注ぐ汾河に沿った平野部、現在の臨汾を中心とした地域に古建築が残っている。



1. 中国山西省の古建築の分布状況

- 中国でも有数の古建築現存地区
 - 現在でも唐宋時代から元明清、中華民国時代にいたる、数多くの多様な建造物文化財が残っている。
 - 2019年10月の段階で、中国で全国重点文物保护单位(日本の国指定文化財に相当)に指定されている建造物文化財(古建築)は2,160か所に上るが、山西省だけで424か所を数えている。
 - さらに省レベル、市レベルの文物保护单位がある。
 - その中で特に多いのが、寺観(仏教寺院及び道教の道観)建築。

2. 山西の地理的環境

- 東に太行山脈を臨み、西に黄河が流れるという地理的環境
 - 周辺の地域(陝西・河南・河北など)の戦乱の火の粉が山西にまで及ばなかった？
 - 山西でも歴代争乱は発生している
- 山西にこれほど古建築が残っている理由は？

2. 山西の地理的環境

- 寺観建築や戯台などは、宗教的根拠と地理的環境などの理由によって場所が選ばれ、建造され、その場所で現代まで維持されてきた
- 戦乱や自然災害によって失われたものも多いが、こんにちまで残ってきたことにも理由がある
- それぞれの
 - ✓歴史環境
 - ✓文化環境
 - ✓社会環境
 - ✓地理環境
 - ✓自然環境等
- が好条件として働いた結果

2. 山西の地理的環境



- とりわけ重視すべき条件
- ✓汾河を通じた水運
- ✓長治を経由する河北・河南への陸運
- ✓交通路によって往来する権力者や商人たちの存在＝経済的環境
- ✓交通路の繁栄はまちの繁栄につながり、寺観への支援がどの時代を通じても途切れることがなかった
- ✓唐時代に創建された寺院がその命脈を保ち続けることができた。
- ✓人びとの暮らしが何代にもわたって継承され、戯曲などの文化的な活動も継続されてきた。

山西省の仏教石窟寺院分布

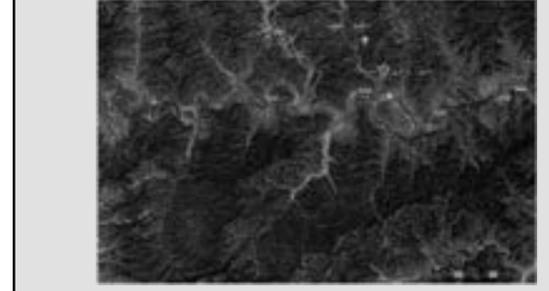
- とりわけ重視すべき条件
- ✓汾河を通じた水運
- ✓長治を経由する河北・河南への陸運
- ✓交通路によって往来する権力者や商人たちの存在＝経済的環境
- ✓交通路の繁栄はまちの繁栄につながり、寺観への支援がどの時代を通じても途切れることがなかった
- ✓唐時代に創建された寺院がその命脈を保ち続けることができた。
- ✓人びとの暮らしが何代にもわたって継承され、戯曲などの文化的な活動も継続されてきた。

3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例

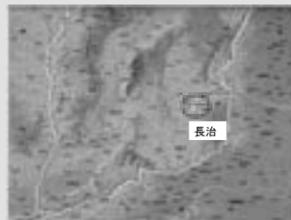


- 長治市平順県所在の龍門寺
- ✓平順県石城鎮源頭村の龍門山麓
- ✓1996年、第四批全国重点文物保护单位。
- ✓龍門寺は北齊の創建と言われる。
- ✓五代の後唐、宋、金に規模を拡大。
- ✓五代、宋、金、元、明、清の建築が残る。
- ✓建築群は南に面して建っている。
- ✓山門（天王殿）は金代の建築。西配殿は現存する唯一の五代の「懸山式」建築。東配殿は明代建築、中殿（大雄宝殿）は北宋建築、後殿は元代建築。

3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例



3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例



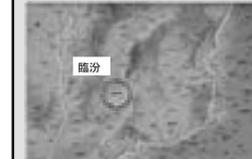
- 長治周辺＝山間部に位置する長治を中心とした山西省東南部の一帯
- 北魏以来の仏教石窟寺院も数多く作られている。
- それらは、街道のまちから少し離れた山の中にあり、人びとの暮らしの場と信仰の場が山によって分けられていた。
- 同様に、この地域に建立された仏教寺院は、多くが背後に山の景観を持っている。

3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例



- 長治市平順県所在の大雲院
- ✓双峰山の南麓に南に門を構えてあり、五代・後晋の天福3年（938）の創建になる。
- ✓金元時代に大きく破損したが、明清に数度の復興があった。
- ✓中軸線に沿って南から天王殿・大仏殿・三仏殿が配置されている。
- ✓天福5年（940）建立の大仏殿には、中国で唯一の五代の寺観の壁画が残る。
- ✓寺外の西南50mに五代の七宝塔がある。
- ✓全国重点文物保护单位。

3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例

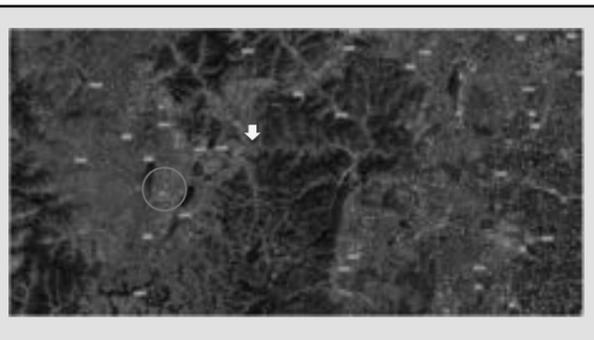


- 汾河平野部＝北から流れる汾河は臨汾を中心とした盆地の平野部にいたる。
- 古くから中国文明発祥の地と言われ、かつて平陽と呼ばれて「堯舜禹」の三代が都を置いたとも信じられていた。
- 汾河の南北のみならず東西への交通の要衝でもあった。
- このため、歴代ここは山西有数の都会として栄えた。
- 古建築の残存は、激動の歴史を反映したものか山間部に比べると唐宋遼金時代のものは少ない。
- 元時代以降の古建築が他に比して多く残るのが特徴である。

3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例



- 旧臨汾県故城所在の大雲寺（鉄仏寺）
- ✓いまはかつて故城の中心にあった鼓楼と東西南北の大通りが名残をとどめているにすぎない。
- ✓唐・貞観6年（632）の創建と言われ、清・乾隆44年（1779）の『臨汾縣志』の「城池図」に城の西南角にその塔が描かれている。
- ✓京都大学人文科学研究所『山西古蹟志』所載の臨汾城内の写真（昭和15年12月撮影）にも清時代の塔と伽藍を展望することができる。
- ✓平野部に築かれた都城の寺院の姿。



3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例

- 旧臨汾県故城所在の大雲寺（鉄仏寺）



清乾隆四十四年『臨汾縣誌』城池図には、城の西南の方角に鉄仏寺とその塔が描かれている

3. 長治周辺及び汾河平野部における仏教寺院建築の例

- 旧臨汾県故城所在の大雲寺（鉄仏寺）



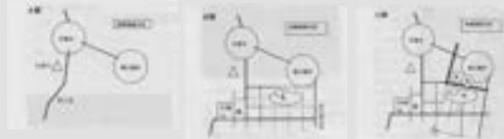
京都大学人文科学研究所『山西古蹟志』所載写真（昭和15年12月撮影）

現在

4. おわりに

●金鶏山という「やま」の存在

- ◆ 柳之御所を中心とする平泉のまちづくり
- はじめからその基準点として存在し、
- その設定の中で、毛越寺、そして無量光院の造営が企図されていたのではないか。



4. おわりに

●京都・平安京

- ◆ 中国の都城に範を取りながら、羅郭(城壁)を設けず、東西と北は山岳にその役割を担わせた
- ◆ 唯一城門を設け塙が築かれた南面は、中央の門(羅城門)を挟んで東寺・西寺があつて国都を鎮護し、
- ◆ 城内には各種の神社が勧請され、国家安寧から怨霊調伏まで、様々な役割を担った。
- ◆ 東北の方角には延暦寺の比叡山が鎮座した。
- ◆ 東山・北山にもその後多くの神社仏閣が建立された。

4. おわりに

●都を眺望する寺



京都・南禅寺

4. おわりに

●外界と隔絶した空間



京都・平等院

4. おわりに

●山西省の寺観建築に注目して気づくこと

- ✓ 人の往来とまちの形成、その盛衰が、寺院の存廃に如実に反映している。
- ✓ 平地のまちにある寺院に対して、やまの中に建立された寺院は通常は山と一体となることを意識しており、人びとがその空間に足を運ばなければ、まちとの距離を実感できない。



山西省・五台山

4. おわりに

●金鶏山という「やま」の存在

- ◆ 柳之御所を中心とする平泉のまちづくり
- 実ははじめからその基準点として存在し、
- その設定の中で、毛越寺、そして無量光院の造営が企図されていたのではないか。
- 現世のものとして実現される「彼岸と此岸」
- まず「やま」と人びとが暮らす「まち」があり、
- そこに寺院が建立される
- ◆ 「まち」の暮らしが「仏国浄土」そのものとして、一体感を体験するものになる?
- ◆ 藤原氏がそこまでを意識し、まちの人びとがそこまで理解していたか?

研究報告2 「出土文字資料の集成的研究」

平泉出土文字資料へのアプローチ (2) 片仮名木簡

三上 喜孝

はじめに

平泉の柳之御所遺跡出土木簡の特徴の一つとして、片仮名が書かれたものが多いことがあげられる。かつて平泉の出土文字資料について検討した岡陽一郎氏をはじめとした研究グループは、その特徴を次のように述べている。

「まず、総合的なものとして、鎌倉などの他の地域と比べると平泉での出土文字資料にはカタカナが多いという指摘を受けた。カタカナの特徴に注目するならば、この指摘は各資料の成り立ちはもとより、いかなる状況で資料が作成されたかを示唆するものである。カタカナは音声を文字化する時に使われることが多いから、これで書かれた資料は音声のメモ化の過程で作られた公算が大きい」¹

全国的に見ても、片仮名で書かれた木簡というのは、実は意外と少ない。ところが調べていくと、12世紀～13世紀頃の、平泉をはじめとした東北地方の遺跡からは、片仮名木簡が出土する例が目立つ。片仮名で書かれた木簡が、平泉をはじめとする東北地方に、しかも特定の時期に集中してあらわれるのはなぜなのか。今年度はこの点について検討することにした。

1. 柳之御所遺跡出土の片仮名木簡

柳之御所跡は、奥州藤原氏三代秀衡（1122～1187）の政庁跡とされ、出土文字資料が数多く出土しているが、昨年度取りあげた、折敷に書かれた「人々給絹日記」²には、人々への支給品目として「ヒトエ」「ウヘ」「カサネ」「カサネタリ」「カリキヌハカマ」「アラハカマ」などの品名が片仮名で書かれている。年代は秀衡が活躍した12世紀半ばごろのものと推定される。このほか、片仮名が書かれた木簡には、おもなものとして次のようなものがある。

【史料1】柳之御所遺跡出土木簡

タ>ラ タ>□ タ>□ タ>ル タ>キ
 タ>キ タ>ミ サ>ラ サ>コ サ>ケ サ>ユ
 サ>□ サ>□ サ>□ サ>キ ク>メ ク>リ
 ク>オ ク>シ ク>リ ク>ツ ク>ツ
 ク>□ ク>□ ス>メ ス>リ ス>ナ
 ス>□ ス>カ ス>キ ク>ケ ス>キ キコハ
 マ>コ マ>キ □□□ カ>ミ カ>ト カ>□ カ>シ
 □□□ □□□ □>□ ツ>□ ツ>キ ツ>ラ ツ>リ
 ココ□ キ>ス □>ナ ハ>コ ハ>チ コ>メ コ>メ
 □□キ キ>ヌ ヲ>ナ ヲ>チ メ>キ ナ>キ シ>□

ワ>□ □>メ タ>ミ □>ヤ ヤ>ケ ナ>ヲ
 コ>□ タ>コ ス>キ ヒ>キ コ>ウ □>レ □>ク チ>□

12行にわたり3文字の片仮名を羅列している³。同じ語から始まるとくに意味を持たない言葉の羅列であり、言葉遊びで書き付けたとする指摘もある⁴。

【史料2】柳之御所遺跡出土木簡

タラウタユニ丈

「タラウタユ」は「太郎太夫」という人名で、「ニ丈」（約6メートル）は長さの単位である。年報12号はこれを「普請に関する遺物」と推定しているが、二丈は絹などの長さの単位の可能性もあり、太郎太夫に支給された絹に関する記録または付札木簡の可能性もある。

【史料3】柳之御所遺跡出土木簡（図1）

（カエルの絵）

アマリニモ□□イウ□
 □□□□□□□□



図1

折敷を転用したとみられる板片に、擬人化されたカエルの戯画と片仮名が記される。

【史料4】柳之御所遺跡出土木簡

カチ（ナ）ニ [アカキニ(ノ) (シ)]
 マイラスハカリソヨ

1行目は文意不明だが、2行目は「まいらすばかりぞよ」と読める。

こうした片仮名木簡の意味を考える上で、次に、筆者がこれまで調査した東北地方の木簡を見ていくことにしたい。

2. 東北地方出土の片仮名木簡

同時期の片仮名木簡が目立ってみられるのは、秋田県である。秋田県内には、片仮名を記した中世木簡が何例も見られる。第一にあげられるのは、山本郡三種町（旧琴丘町）の盤若台遺跡出土の木簡である(図2)⁵。

【史料5】秋田県盤若台遺跡出土木簡

イロハニホヘトチリ□□ [ヌル] ヲワカヨ
 □タレソツネナラム□□ [ウキ] ノオクヤ
 マケフコエテアサキ
 ユメシエ□□ [ヒモ] セス[]

イロハニホヘトチリヌルヲワ
カヨ□

13世紀前半と推定される井戸跡から、折敷を転用した木簡が出土し、片仮名で書かれた「いろは歌」の全文が書かれていた。「いろは歌」がくり返し書かれている点や、文字の割り付けにこだわっていない点などを考えると、「いろは歌」を習書した木簡であると考えられる。

第二は、大仙市の峰吉川中村遺跡出土の片仮名木簡である(図3)⁶。円形をした曲物の底板が半裁されたところに書かれていたもので、もともと円形の曲げ物の底板に文字が書かれ、後に欠損したものであると思われる。全文が片仮名で記されているが、完全な釈読は困難であり、意味がとりにくいが、何らかの文章を書き記したものであると推定できる。

【史料6】秋田県・峰吉川中村遺跡出土木簡

[]
[] □□□ヲ
□□ [] カ□ニ□□
□□ [] ヲクレ []
[] □□カリ□□
□ルトタレカ □
ウ□□ヲヒテ
チシヤ□□リ

第三は、横手市の観音寺廃寺跡出土木簡である(図4)⁷。12世紀中葉と推定される井戸跡から、漢字とその読みをカタカナで記す音義木簡が出土している(『木簡研究』24)。これによると、「目」の読みとして「メ」、「鴨」の読みとして「ヒエトリ」、「男」の読みとして「オノコ」といったように、読みがカタカナで記されている。

観音寺廃寺跡からは、他にも木簡が数点出土しているが、その中には「御仏殿前申」と読めるものも出土しており、この遺跡が寺院に関係する遺跡であることは確実である。

第四は、秋田県井川町の洲崎遺跡の、やはり13世紀頃と思われる井戸から出土した人魚供養札木簡である(図5)⁸。

【史料7】秋田県・洲崎遺跡出土木簡

(僧侶と人魚の絵)
「アラ、ツタナヤ、テウチ、テウチニト互候、そわ可」

洲崎遺跡は、八郎潟に面した鎌倉時代の港町の遺跡であり、『吾妻鏡』にみえる「湯川湊」に相当する遺跡と考えられている。洲崎遺跡から出土した人魚供養札は、アザラシやアシカなどの鰭脚類の漂着にともない、不吉な出来事が起きぬことを願って作られた祈祷札のような性格のものである⁹。

余談になるが、この木簡と関連して興味深いのは、『吾妻鏡』宝治元年(1247)5月29日条の記事である。

【史料8】『吾妻鏡』宝治元年(1247)5月29日条

申して云わく、去る十一日、陸奥国津軽海辺、大魚流れ寄る。その形偏に死人の如し。先日由比海水赤色の事、若しくは此の魚の使の故か。随いて同じころ、奥州海浦波濤し、赤きこと紅の如しと云々。此の事則ち古老に尋ねらるるの処、先規不快の由之を申す。所謂文治五年夏、此の魚有り。同秋泰衡誅戮す。建仁三年夏又流来す。同秋左金吾の御事あり。建保元年四月出現す。同五月義盛の大軍、殆ど世の御大事となると云々。

これによれば、古老が語ったこととして、文治5年(1189)の奥州合戦、建仁3年(1203)の比企氏の乱、建保元年(1213)の和田氏の乱など、兵乱直前に、東北地方の海岸で大魚が打ちあげられていたことが紹介されている。おそらくはアザラシなどの鰭脚類のことであろう。この木簡も、湊町の洲崎遺跡周辺でアザラシが打ち上げられたことに対して僧侶が祈祷を行ったことを描いたものと考えられる。

秋田県出土の片仮名木簡は、おおむね12世紀～13世紀のもものと推定され、特定の時期に集中している。秋田県のほかにも、山形県遊佐町の大楯遺跡からも、片仮名が書かれた木簡が出土している(図6)が、末尾に「保元」という年号が書かれていることから、1156～1158年の間に書かれた可能性が高く、これもやはり12世紀代の片仮名資料である。大楯遺跡は、中世の遊佐荘にかかわる遺跡であると考えられている¹⁰。

【史料9】山形県・大楯遺跡出土木簡

(オモテ面)
] スシヤ []
] ハナ []
日ヨリ []
□ロ□□ []
] ルイワ]
ワアサ]
] ヲハナ]
] 又シ□]
リチ×]
] ラ×]

(裏面)
] ルヘ×]
イノ□]
] ナム○]
ラルヘ□]
保元 []

これらの片仮名木簡は、従来あまり注目されてこなかったが、あらためて集成してみると、12世紀～13世紀の東北地方各地で特徴的にあらわれる木簡であることが実感される。

図2 盤若台遺跡出土片仮名木簡



図3 峰吉川中村遺跡出土片仮名木簡

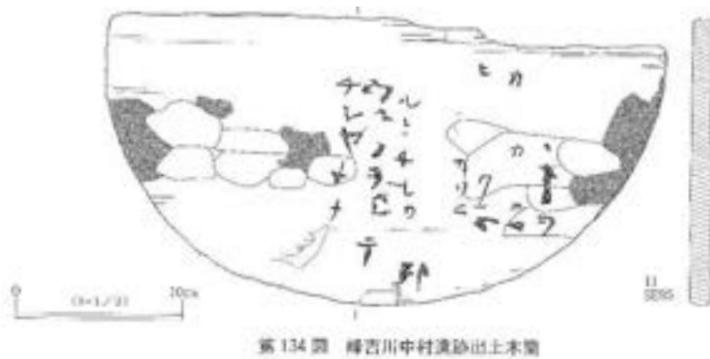


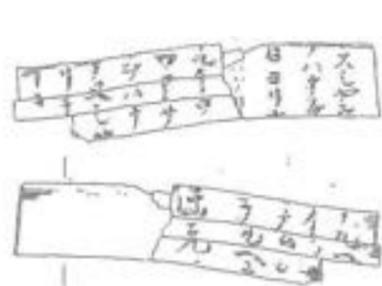
図4 観音寺廃寺出土木簡



図5 洲崎遺跡出土人形供養札



図6 大楯遺跡出土木簡



3. 片仮名表記資料の意義

次に、平泉に片仮名表記の木簡が数多く見られることの意味について考えてみたい。

中世史家の網野善彦氏は、日本社会の文字の特質について論じるなかで、片仮名の意味についてもふれている¹¹。それによると、片仮名交じりの文書は、現在残っている中世文書の中の1%か2%にすぎず、仮名の普及はもっぱら平仮名の普及という形で進行していったのだと指摘する。

では、このような少数派の片仮名は、どういう用途で文書に使われたのだろうか。網野氏によれば、「基本的には、口頭で語られる言葉を表現する場合に使われた」という。しかも中世前期においては、しばしば神仏と関わりを持つ場合が多いことも指摘する。

たとえば起請文や願文、託宣記など、神仏と関わりを持ち、しかも口頭で語られたことにかかわる場合に、片仮名が使われている傾向がある。また、落書あるいは落書起請にも片仮名が使われている。これらもまた、「神仏に変わる声」という性質を持っているのだという。

このように網野氏は、神仏に関わりがあり、かつ口頭で語られることを文字化する際に、片仮名が用いられる傾向にあると推定したのである。

これに対して黒田弘子氏は網野説を批判し、有名な紀伊国阿弋川荘の片仮名申状（建治元年＝1275）を含む荘園関係文書の検討から、当該期の在地社会にあつては、平仮名は公文層以上、片仮名は百姓クラスという、文字と身分との対応関係が存在するのではないかと指摘した¹²。

ただし黒田説についても異論がある。たとえば落書起請については、「書き手を特定されないよう、字体の個性がやすい漢字ではなく、画数が少なく個性のでにくい片仮名を中心に用いるのが落書起請の文字使いの決まりであったという解釈も可能であり、特定の文書に特定の文字が使われることと、書いた人間の文字使用能力を直接的に結びつけることには慎重でなければならない」とする見方もある¹³。

ここで、本来の片仮名表記の意味について考えてみると、もともと漢文の読み方を注記するという実用的な機能をもつ文字であった¹⁴。片仮名は寺院で経典を読み下すときの訓点として使われはじめたといわれており、片仮名の普及には、経典を扱う僧侶による普及が密接にかかわっていた可能性が考えられる。片仮名の源流は新羅仏教に求められ、それが日本の南都寺院の学僧が用いる訓点の字体にも影響を与えたともいわれる¹⁵。もちろん僧侶の中には漢字、平仮名、片仮名を使いこなす学僧がいたことはいうまでもないが、その中でも片仮名が、音声を表すための最も身近な表記方法として習得しやすかったのではないだろうか。

そのような視点でみると、漢字の音を片仮名で表記した木簡が見つかった秋田県の観音寺廃寺跡は、12世紀～13世紀にかけての寺院跡と考えられており、寺院において片仮名が経典の読みの際に普通に用いられていたことが背景となり、音義を片仮名表記したと考えられるし、井川町の洲崎遺跡の人魚供養札も、僧侶による「人魚」の供養の姿が描かれていることから、これが僧侶の手によって書かれたとみることも可能である。すなわち観音寺廃寺跡出土木簡も、洲崎遺跡出土木簡も、僧侶あるいは寺院関係者によって片仮名表記が用いられた可能性があるのである。こうして片仮名表記は、経典を読み下す必要のある僧侶や寺院関係者たちの手によって広められていったのではないだろうか。

このことは、当該時期のこの地域における文字文化の担い手に、どのような人々が介在したかを知る手がかりとなる。経典の読み下しなどの際に日常的に片仮名を用いる僧侶や寺院関係者たちが、この地域における文字文化の担い手として大きな役割をはたしていたのではないだろうか。もちろんそれ以前から、これらの地域においても漢字を中心とする文書行政が活発に行われていたことはいうまでもないが、それとはやや位相が異なる、僧侶や寺院関係者による文字文化への関与という実態を、片仮名木簡は示しているのではないだろうか。

4. 仏都としての平泉の再評価

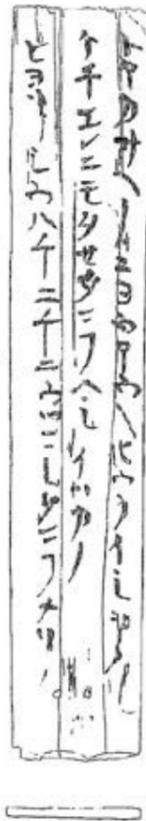
以上の見通しを検証する上で示唆的なのが、平泉町の志羅山遺跡出土木簡である。志羅山遺跡は、JR東北本線平泉駅の西約100m、平泉町役場周辺の市街地南端に広がる遺跡である。発掘調査では、掘立柱建物・道路・溝・井戸・池・埧（るつぼ）埋納遺構・トイレ遺構などを検出し、かわらけ・陶磁器・木簡・轡（くつわ）・馬骨・笹塔婆などが出土した。これにより、「都市」平泉には道路の規模・間隔に一定の規格があることが指摘されている。

志羅山遺跡からも、片仮名木簡が出土している。

【史料5】志羅山遺跡出土木簡（図7）

トヤガサキノニヨウホウキョウノウイシヲハ
ケチエンニモタセタマフヘシ イツカノ
ヒヨリ シウハチニチニウツマシタマウナリ

図7



〔読み下し文〕

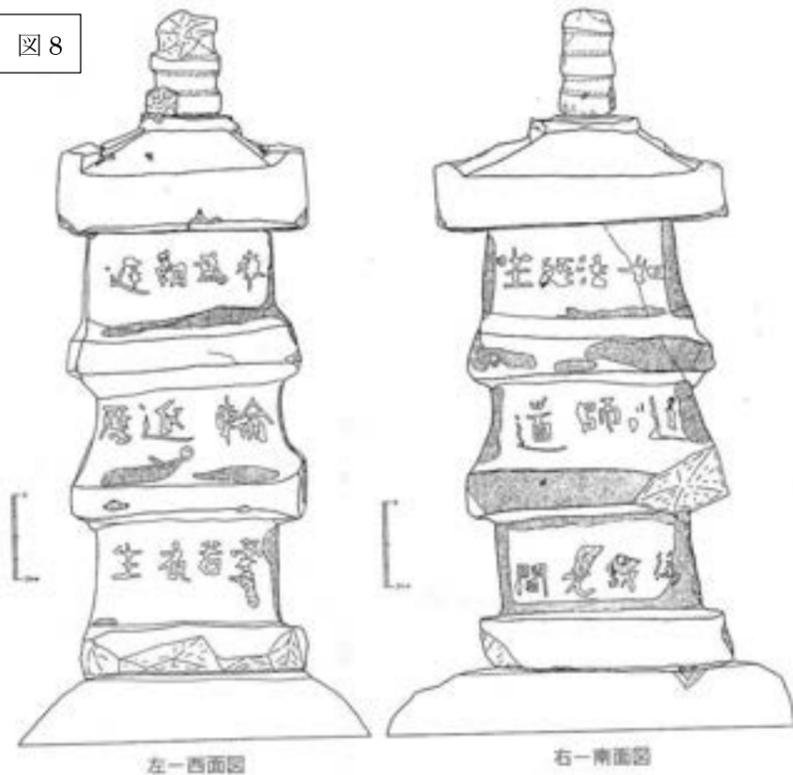
如法経を坐す。朝庭・神祇・父母・衆生・含霊の奉為（おほんため）に、小師道輪。延暦二十年（八〇一）七月十七日。無間の苦を受く衆生を愈し、永く安楽を得て、彼岸に登らしめんが為なり。

この木簡の解釈については諸説あるが¹⁶、漢字仮名交じり文で読むとすれば、「トヤガサキに如法経の石をば結縁に持たせたまうべし。五日の日より十八日に写しましたまうなり」となるか。「如法経」とは本来、一定の法式にのっとりて経を写することをいうが、多くは法華経のことをいう。

群馬県桐生市に所在する山上多重塔（延暦20年=801年）の銘文には、「如法経」の名がみえるが、その銘文によれば、塔身頂部にある円形の穴に法華経を安置して供養したという¹⁷。

【史料6】群馬県・山上多重塔（図8）

	(南面)	(西面)	(北面)	(東面)
(上層)	如法経坐	奉為朝庭	神祇父母	衆生含霊
(中層)	小師道	輪延暦	廿年七	月十七日
(下層)	為愈无間	受苦衆生	永得安楽	令登彼岸



(国立歴史民俗博物館展示図録『古代の碑』1997より)

【史料7】山形県・立石寺如法経碑

立石寺如法経所碑并序
 維天養元年歳次甲子秋八月十八日丁酉、真語宗
 僧入阿大徳、兼濟在心、利物為事、同法五人、凝志一
 味、敬奉書妙法蓮華経一部八卷、精進加行、如経所
 説、殊仰大師之護持、更期慈尊之出世、奉納之靈崛
 願既畢、願令参詣此地之輩、必結礼拝此経之縁、因
 一見一聞、併麼巨益、上則游知足之雲、西則翫安養
 之月、于時有积以慶、及作銘曰
 善哉上人 写経如説 利益所覃 誰疑記萌

〔読み下し文〕

維天養元年、歳は甲子に次る秋八月十八日丁酉真語宗僧入阿大徳、兼濟心に在り、物を利することを事と為す。同法五人、志を凝らして一味敬いて妙法蓮華経一部八卷を書し奉る。精進加行、経に説く所の如く、殊に大師の護持を仰ぎ、更に慈尊の出世を期す。之を靈崛に奉納し願うこと既に畢んぬ。願わくは此の地に参詣の輩をして必ず此の経を礼拝するの縁を結ばしめ、一見一聞に因りて麼巨の益を併せ、上は則ち知足之雲に遊び、西は則ち安養之月を翫ぶ。時に积以慶有り、銘を作るに及びて曰く、
 善哉上人 写経に説く如く 利益覃る所 誰か記萌を疑わん

如法経碑は、9世紀初頭の山上多重塔（群馬県桐生市、延暦20年=801年）、浄水寺如法経碑（天長3年=826）などを嚆矢として、11世紀後半12世紀にかけて東北から九州までの広い範囲で作られるようになる¹⁸。

志羅山木簡に話を戻そう。最後の「ウツシマシタマウ」は、「写し坐し（増し）たまう」すなわち書写を意味するのであろう。冒頭の「トヤガサキ」についても諸説があるが、近世の記録類で毛越寺を構成する四方鎮守に関わる坊として確認される「鳥屋崎」の可能性を指摘する佐藤嘉広氏の説を支持したい¹⁹。

また、次のような木簡も出土している。

【史料8】志羅山遺跡出土木簡

- ・禅門房之定定計也覚禅房 禅門房之定計也覚善房増春僧声 増春僧声 是見
- ・大力尊門 【 愛楽 必口必蓮妙法蓮華経妙法蓮華妙法蓮華】(天地逆)

「覚禅房」「妙法蓮華経」などがくり返し書かれていることから、僧侶や経典など仏教に関わる習書

木簡（文字を練習した木簡）であることは明らかである。しかも書風を観察すると、写経に用いられる独特の書風で書かれていることが確認できる。これらのことから、志羅山遺跡の周辺では、僧侶が法華経の書写に積極的に関わっていたことは明白であり、そのことは同時に、書写した法華経を読むための訓点として片仮名が日常的に使用されていた可能性を示唆する。

このように考えると、平泉の柳之御所の周辺では、当然のことながら経典の書写や講説が頻繁に行われており、そのことが、片仮名の使用頻度を高めていたことが想定され、その影響が、柳之御所出土木簡にもあらわれているとみるべきであろう。

おわりに

片仮名木簡の存在は、漢字を用いた通常の文書行政とは位相が異なり、経典の読み下しや講説などを通じて、僧侶や寺院関係者、あるいはその影響を受けた人々による文字表現が普及したことを意味するのではないだろうか。平泉から片仮名木簡の出土例が顕著にみられるのは、僧侶や寺院における日常的な文字使用の発露であり、ごく自然に片仮名を用いた情報伝達が行われていた可能性を示唆している。

たとえば平泉文化の影響を受けていると考えられている遊佐荘の故地・山形県の大楯遺跡から片仮名木簡が出土していることも、その象徴的な事例といえるだろう。平安末～鎌倉時代の遊佐荘にあるとされている大楯遺跡からは、「闘茶札」と呼ばれる木簡も出土している。寺院などを中心に行われていた闘茶の文化が、東北地方の日本海側の荘園といわれている遊佐荘にも、比較的早い段階で伝わっていたことが考えられ²⁰、こうした「闘茶札」の存在からも、寺院における文字文化の文脈の中で片仮名木簡をとらえることができる可能性を示唆している。

平泉の都市的性格は、これまで考古学の発掘調査成果等で明らかになってきたが、行政的な都市という側面だけでなく、当然ながら「仏都」としての側面についても、あらためて評価すべきであることを、片仮名木簡は示しているように思う。

1 岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦（助言者：菅野文夫）「平泉出土文字資料の再検討 その2」『平泉文化研究年報』13、2013年。

2 三上喜孝「平泉出土文字資料へのアプローチ（2）饗宴と文字」『平泉学フォーラム』創刊号、2021年。

3 岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦（助言者：菅野文夫）「平泉出土文字資料の再検討 その1」『平泉文化研究年報』12、2012年の積文を、若干改変した。

4 岡陽一郎「中世人の「くらし」と「こころ」」『[第3回 平泉町]世界遺産講演会 報告書』平泉町・平泉町世界遺産推進協議会、2003年。

5 秋田県教育委員会『秋田県文化財調査報告書 第319集 盤若台遺跡』2001年。なお盤若台遺跡出土のいろは歌木簡の再釈読と意義については、伊豆俊祐「盤若台」遺跡出土いろは歌木簡の再釈読」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』30、2016年を参照。

6 三上喜孝「峰吉川中村遺跡出土片仮名木簡について」秋田県教育委員会『秋田県埋蔵文化財調査報告書 第505集 峰吉川中村遺跡』2016年。

7 秋田県教育委員会『秋田県文化財調査報告書 第321集 観音寺廃寺跡』2001年。

8 秋田県教育委員会『秋田県文化財調査報告書 第303集 洲崎遺跡』2000年。

9 三上喜孝「古代日本の境界意識と信仰 ―古代北方地域の事例を中心に―」『古代・中世の境界意識と文化交流』勉誠出版、2011年。

10 山形県・山形県教育委員会『山形県埋蔵文化財調査報告書 第139集 大楯遺跡 第2次発掘調査報告書』1989年。

11 網野善彦『日本の歴史をよみなおす（全）』ちくま文庫、2005年、初出1991年。

12 黒田弘子『ミミヲキリ ハナヲソギ 一片仮名書百姓申状論一』吉川弘文館、1995年。

13 久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く1 中世文書の流れ』山川出版社、2006年。

14 築島裕「片仮名の歴史的研究」『日本學士院紀要』51-3、1997年。

15 小林芳規『角筆のひらく文化史』岩波書店、2014年など。

16 入間田宣夫『都市平泉の遺産』山川出版社、2003年、菅野成寛「総説 平泉藤原氏と仏教」菅野成寛監修・編『平泉の文化史2 平泉の仏教史 歴史・仏教・建築』吉川弘文館、2020年など。

17 小倉慈司・三上喜孝編『古代日本と朝鮮の石碑文化』朝倉書店、2018年。

18 山口博之『山寺立石寺 霊場の歴史と信仰』吉川弘文館、2021年。

19 佐藤嘉広『仏都平泉の造営と構造』同成社、2021年。

20 三上喜孝「東北地方の闘茶札と鎌倉」国立歴史民俗博物館展示図録『中世寺院の姿とくらし』、2002年。

令和3年度「第2回平泉学研究会」実施報告

- 1 日 時 令和4年2月5日(土) 13:00~16:00
- 2 会 場 岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター 体験学習室・講座室
- 3 主 催 岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター、岩手県、岩手県教育委員会、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター
- 4 対 象 研究者(事前に県内文化財関係担当者、世界遺産シンポジウム参加者、平泉関係研究者、過去3年間の共同研究者等を中心に招待メールを送信)
- 5 実 施 方 法 岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターをハブとしたZoomによりリモートで実施。
- 6 日程・発表者
 - 研究報告① 「柳之御所遺跡の考古学的研究」
県教育委員会(公財)県文化振興事業団埋蔵文化財センター 北村忠昭
 - 研究報告② 「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」
奈良大学教授(国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員) 岡田 健
 - 研究報告③ 「出土文字資料の集成的研究」
国立歴史民俗博物館 研究部教授 三上喜孝
 - 研究報告④ 「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」
岩手大学平泉文化研究センター 教授 劉 海宇
岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 大道篤史
 - 研究報告⑤ 「日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究」
岩手大学平泉文化研究センター 准教授 土屋直人、准教授 田中成行
岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター 中村 孝
- 7 参 加 者 数 60名



令和3年度「第2回平泉学フォーラム」実施報告

- 1 日 時 令和4年2月6日(日) 10:30~16:15
- 2 配 信 会 場 ホテル武蔵坊 コンベンションホール桜の間(平泉町)
- 3 主 催 ・ 共 催
(主 催) 岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター、岩手県、岩手県教育委員会、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター、「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会
(共 催) 平泉町教育委員会、一関市教育委員会、奥州市教育委員会
- 4 対 象 一般
- 5 実 施 方 法 新型コロナウイルス感染症拡大により、無観客・web開催(YouTubeの同時配信)
- 6 日程・報告者
 - 基調講演 「奥州藤原氏の薬師信仰と赤沢七仏薬師像」
青山学院大学名誉教授 浅井 和春
 - 研究報告① 「柳之御所遺跡の考古学的研究」
県教育委員会(公財)県文化振興事業団埋蔵文化財センター 北村 忠昭
 - 研究報告② 「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」
奈良大学教授(国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員) 岡田 健
 - 研究報告③ 「出土文字資料の集成的研究」
国立歴史民俗博物館 研究部教授 三上 喜孝
 - 研究報告④ 「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」
岩手大学平泉文化研究センター 教授 劉 海宇
岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター 戸根 貴之
 - 研究報告⑤ 「日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究」
岩手大学平泉文化研究センター 准教授 土屋 直人、准教授 田中 成行
岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター 中村 孝
 - 調査報告① 「観自在王院跡の調査」
平泉文化遺産センター 鈴木 江利子
 - 調査報告② 「骨寺村荘園遺跡の調査」
一関市教育委員会 菅原 孝明
 - 調査報告③ 「長者ヶ原廃寺跡の調査」
奥州市教育委員会 中島 康佑
 - 調査報告④ 「白鳥館遺跡の調査」
奥州市教育委員会 及川 真紀
- 7 動画視聴者数 640名



平泉学研究年報 第2号

令和4年3月31日

発行 岩手県
「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会
(事務局：岩手県文化スポーツ部文化振興課)
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1
編集 岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター
印刷 川嶋印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町佐野原21
TEL 0191-46-4161